

# イギリスにおける「囲い込み」と 資本主義経済の成立過程について

川 端 実 美

1. はじめに
2. 第一次囲い込み
3. 第二次囲い込み
4. おわりに

## 1. はじめに

資本主義経済の成立過程を分析する場合、蒸気などのエネルギーや交通機関の技術的発達と相俟って、イギリスにおいて18世紀半ばから綿工業に始まり製鉄業や炭坑業などの、工業部門における産業革命をベースにして展開するのが通説となっている。資本主義経済の成立には資本の蓄積と労働力の発生が基本的な条件として必要である。このような資本の蓄積と労働力の発生が、農業においても、第一次囲い込み期の終わり頃 から第二次囲い込み期にかけてみられたのである。資本の蓄積と労働力の発生新时期から、第一次囲い込みは資本主義経済成立の準備段階であり、第二次囲い込みは資本主義経済の形成・成立過程であると言えるだろう。本稿では、このような「囲い込み」という経済的出来事を検討することによって資本主義経済の成立過程をみていくことにする。もちろん「囲い込み」についての経済史分析には数多くの研究成果がみられるが、ここでは、これらの研究成果を踏まえ、それ

らを整理しながら「囲い込み」を分析していくものである。そこで行論の順序を示せば、最初に、イギリス資本主義経済成立の準備段階である第一次囲い込みを述べ、次に、第一次囲い込みの延長として資本主義経済の形成・成立過程に規定的な役割を果たした第二次囲い込みについて考察していくものである。

## 2. 第一次囲い込み

最初に、第一次囲い込みが行われた時期をみると、期間は、秦玄龍氏によれば、14世紀半ばから16世紀にかけてであり<sup>1)</sup>、小林茂氏によると、15世紀から16世紀にかけて<sup>2)</sup>と、研究者によって多少の相違はあるが、表1より15世紀後半から17世紀後半にかけて囲い込みが行われていたことが明らかとなる。

そこで、第一次囲い込みがなぜ行われたのか経済的背景をみるために、当時のイギリスにおける毛織物工業の発展についてみていこう。当時の社会情勢についての秦玄龍氏の説明を要約してみると、次の通りである。12世紀頃

表1 レスターシャーの囲込の進展

年 代	囲込がはじ まった村	累 計	囲込が完了 した村	累 計
12世紀—1484	9	9	8	8
1485 — 1517	47	56	21	29
1518 — 1549	20	76	7	36
1550 — 1577	12	88	3	39
1578 — 1607	65	153	22	61
1608 — 1649	34	187	41	102
1650 — 1699	26	213	45	147
1700 — 1799	4	217	9	156
不 明	26	243	30	186
計	243		186	

(出典) 堀江英一『近代ヨーロッパ経済史』日本評論社、1960年 P.104

までのイギリスは羊毛輸出国であった。それが13世紀頃になると、国家が毛織物を自国の最大の産業として位置づけることによって国内の羊毛を原料にして自国で毛織物を生産するようになった。さらに、フランダースやオランダ、南東ベルギーなどからの優秀な移住職人達の技術力を利用することによってイギリスの毛織物工業は飛躍的に発展したのである。特に、良質の毛織物製品の生産によってその需要は、国内はもちろん、世界市場へと拡大していったのである。このような経済的情勢のもとで、開放耕地を中心とする囲い込みが発生したことは歴史的に必然的な出来事であった<sup>3)</sup>。

こうした社会状況のもとで、第一次囲い込みを行った主体者についてみる

表2 階層別にみた囲い込み推進者

	人 数	囲 込 み 面 積 (全体に対する%)
マ ナ ー 領 主	293 ( 50%)	61 %
借 地 農	153 ( 26%)	26.4
自作農および 膳本自作農	139 ( 24%)	12.4
計	585 (100%)	99.8

(出典) 椎名重明「農業における産業資本形成」『西洋経済史講座Ⅱ』  
岩波書店, 1965年, P. 217

と、椎名重明氏がミッドランド6州における囲い込みの状況を示した表2のように、囲い込み主体者の585人のうち293人が領主層であり、全体の50%を占める。また、囲い込んだ面積は全体の60%を超えている。次に、借地農が主体者となった場合は、領主層の約半数で、全体の25%強である。同様に、囲い込んだ面積も領主層の半分以下であり、全体の25%強である。さらに、自作農等が主体者の場合は人数的には借地農の場合とほとんど変わらないが、囲い込み面積については全体のわずか10%程度でしかない。ここで、借地農

に自作農等分をプラスしてみると、たしかに、人数では全体の50%を占めるが、囲い込んだ面積は全体の40%弱であり、小規模の囲い込みであることがわかる。これより、第一次囲い込みは農民層（借地農と自作農等）が主体となって進行したとみるよりも領主層中心に実行に移されていったとみるべきであろう。以上のような囲い込みの主体者から第一次囲い込みを領主的囲い込みと農民的囲い込みに区分することにする。

次に、囲い込みの範囲を地域別にみってみると、ミッドランド地方が最も多く、特定の地域に偏っており、全体として囲い込まれた面積もイギリス全体の総面積の3.6%の644,000エーカーであるといわれている。したがって、開放耕地は、イギリスにまだまだ多く残存していた<sup>4)</sup>。

ところで、ここで、先に述べた領主的囲い込みと農民的囲い込みの区別を明確に示しておこう。

#### (1) 領主的囲い込み

従来、羊はマナーにおいて、夏は入会地の放牧場で飼われ、冬には牧草地から取れる乾燥した草を飼料に小屋で飼育されていた。細々とした放牧業であった。このような状況下では、大規模な牧羊業への発展は望めない。ところが、農産物価格の下落により従来の領主経営が維持できなくなると、労働生産性の高い牧羊業が注目され始めたのである。牧羊業発展のために、大規模な囲い込みはぜひとも必要であった。そのありさまを、秦玄龍氏は、「旧荘園領主を中心として貴族、商人等の大土地所有者もまた、牧羊による収入増大をはかるために、積極的に共有地や耕地を囲い込み、それら広大な土地を牧羊地に転じはじめた<sup>5)</sup>。」と端的に表現している。また、領主層による囲い込みは地代収入増をも意図していたために大規模なものとなった。その状況を椎名重明氏は、「農民を追い立てることによって村落がつぶれたり、さびれたりする例が数多かったので、『人間をなくする囲い込み』とも呼ばれた<sup>6)</sup>。」と説明している。さらに、堀江英一氏は、「たとえば、ミッドランド地帯のレスターシャーでは、大規模な囲込運動が15世紀後半にはじまり1700年頃まで急激な勢いで進展し、『廃村』つまり住民のいなくなった村が

1500年以前に18, 1550年以前に14, 1600~1650年に3, 1700年以前に1, 合計54ヵ村に達した<sup>7)</sup>。」と具体的に数字を挙げながら囲い込みの凄じさを表現している。

さて、このようにして囲い込まれた土地はどのようにして経営されていたのであろうか。囲い込まれた土地の一部を領主が直接経営し、ほとんど大半を領主の直営地を耕作していた借地農が経営していた。借地農は領主から様々な規制を受けながら経営のために必要な家畜や農具・種子などを領主から借り、マナーの賦役中心の経営をしていたのである。ここでは、彼らは領主に依存・従属しているわけだから、借地農自身の資本蓄積はありえない。たとえば、多くの余剰を生みだしたとしても、それが産業資本に転化することはない。すなわち、借地農は広い耕地を耕しているか、羊を飼っているだけで拡大再生産などありえず、資本家的農業経営にはほど遠い。しかし、16世紀の後半になると状況が変わりつつあった。農業経営形態の変化により農民層の分解が進み、従来の借地農が資本家的借地農に転化し始め、富裕な農民層や農業労働者が出現しだしたのである。しかし、まだまだその分解は不完全であった<sup>8)</sup>。

## (2) 農民的囲い込み

マナーにおいて生産力が高まるとそれに伴う市場の発達がみられ、賦役が金納化されることによって農民層の労働生産性が上昇し、今までのような領主経営が維持できなくなり、領主は、直営地を農民層に一括、あるいは、分割して貸し出すようになった。このようにして農民層が土地を保有するようになり、直営地の小作地化が進展した。しかしながら、農民層はいぜんとして封建的規制を受けていた。ところが、領主的経済の崩壊が進む中で、領主と農民の関係は貨幣的契約的關係の性格を強め、わずかばかりの土地しか持たない農民層は耕地の一部を草地(レイ)化して土地を借りたり、買い入れたりして土地保有の拡大を図るようになった<sup>9)</sup>。さらに、農民層は穀物価格と羊毛価格の市場動向をとらえた生産に傾注し、このことが農民層に大きな利益をもたらした。やがて、耕地の一部草地化はレイの個別的利用を促進さ

せ、農民が話し合いを行い、地条の交換・結合を推し進めたりするなどの囲い込みへと変化していった。このようにして、農民層は経営できる土地を一カ所に集中してもつようになった。つまり、農民層の自主的な活動により、封建的規制が打ち破られ、農民層は囲い込み地を自由に経営できるようになったのである。囲い込み地を自由に利用・経営可能な農民は増加するとともに、ますます富裕化し、資本主義的経営者となるが、囲い込みに適応できなかった農民は没落し、農業労働者となった。このような開放耕地制度の崩壊は土地の所有と経営の分離を推し進め始めた。以上のような農民的囲い込みは体制を内側から変化させ、土地所有者と資本主義的農業経営者や農業労働者を形成し始めた。まさしく、地主が地代を設定し、小作人が自己の利益増のために地主から土地を借りて労働者を使いながら経営していくという今日の資本主義的農業経営が芽を出していたのである<sup>10)</sup>。第一次囲い込みの1つである農民的囲い込みは、さらに、第二次囲い込みにつながり、一層資本主義的農業経営を明確にしていくのである。

### 3. 第二次囲い込み

第一次囲い込みは羊毛生産のためにほぼ15世紀後半から17世紀後半にかけ

表3 第二次議会囲込の進行状態

	共通耕地・林野		林野のみ	
	法律	面積	法律	面積
1700-1760	152	エーカー 237,845	56	74,518
1760-1801	1,749	2,428,721	521	752,150
1801-1844	1,075	1,610,302	801	939,043
1845以後	164	187,321	508	334,906
総計	2,870	4,464,189	1,893	2,100,617

(出典) 堀江英一『近代ヨーロッパ経済史』日本評論社、1960年 P.159

て行われたが、第二次囲い込みは小林茂氏によると、18世紀後半から19世紀前半にかけてである<sup>11)</sup>という。堀江英一氏は、表3にもとづいて同様の主張を行っている。これらの諸説より判断するかぎりでは、第二次囲い込みは18世紀から19世紀にかけてと判断できる。

次に、囲い込みの範囲を地域的にみると、第一次囲い込みが集中したミッドランド地方及びイースト・アングリア地方中心に展開されている。規模については、表3から第一次囲い込みと比較してケタ違いの規模で囲い込みが実行に移されていることを容易に理解できる。

ここで、第二次囲い込み時期の社会情勢について言及しておく必要がある。羊毛の輸出は、たしかに、1660年代頃から国内の毛織物業保護のために禁止されていたが、穀物については1689年に輸出奨励政策がとられるなど外国に輸出しており、穀物の高価格が維持された。また、人口増加により、農産物や食肉に対する需要が増大し農民の生産意欲は高まり、耕地拡大の必要性が叫ばれていた<sup>12)</sup>。

第二次囲い込みは別名、「議会囲い込み」と言われている。それは議会在り囲い込み法を發布し、耕地や林野などの囲い込みを合法化したことによる。このような囲い込みは迅速化のために個別的囲い込み法へと変わっていった。特に、個別的囲い込み法の成立状況については、小林茂氏が、「18世紀後半から19世紀前半にかけて、囲い込み法令の成立動向は穀物価格の変動と平行した関係にある<sup>13)</sup>。」と述べているように、囲い込み法の件数と穀物価格とは密接な関係があった。

ところで、第二次囲い込みはどのような階層によってなされたのであろうか。言うまでもなく、領主＝地主などの階層である。なぜなら、近代的な地主に変わろうとしていた彼らにとって開放耕地制度の存続は大きな障壁であり、農産物価格の高騰に伴う地代の増収を図るためにはその障壁を取り除く必要があった。やがて、国家権力の保護のもと、開放耕地のほとんどが囲い込まれ、「耕地は広くまとめられ、農業技術の革新によって生産力は増大し、土地生産性も向上した<sup>14)</sup>。」「1790年から1813年の間に、イギリスのほとん

ど全土にわたって、地代は約2倍まで増大した<sup>15)</sup>。」と小林茂氏が述べているように、地主階層は土地価格の高騰により、他のどんな階層よりも地代増収という多大な恩恵を受けたのであった。

第二次囲い込みによって利益を受けたもう1つの階層がある。それは、第一次囲い込みの末期頃から活躍しだした資本家的借地農であった。彼らは、ノーフォーク型輪作農法などの科学的農法を積極的に取り入れた<sup>16)</sup>。この状況について、小林茂氏は、「第二次囲い込みによってまとめられた大型の耕地のうえに多額の資本を投下し、新しい農業技術や農法を導入することによって生産力を増強し、収穫量を増やし、穀物価格の上昇と相俟って、大きな収入をあげた。その高額収入を再び農業経営に投下し、彼等は拡大再生産の途を前進することになるのである<sup>17)</sup>。」と述べている。これらはまさしく、資本主義的大農経営を前提とするものであった。このような資本家的借地農による資本主義的大農経営の進展は、同時に小農経営の没落を決定的なものにしたのである。つまり、経営における両極分解<sup>18)</sup>は、一方では、囲い込みによってますます広くなった土地を経営する資本主義的大農経営者を生み出し、他方では、わずかばかりの耕地では大農経営に対抗できなくなり、賃労働者に転化することを余儀なくされた小農民層（農業労働者、工業労働者）をもたらしたのである。ここに、第二次囲い込みによって土地の所有と経営が完全に分離し、土地所有者と資本家的借地農、そして、農業労働者の近代的な階層が形成され、イギリスにおける農業部門の資本主義化が進行していくのである。秦玄龍氏は、第二次囲い込みのもたらした結果について次のように説明している。要約すると次の通りである。まず第一に、土地所有の近代化の確立を挙げることができる。土地所有の資本主義的關係は、囲い込み運動の中から推し進められ、一方では、原始的蓄積の強行と関連しながら、資本主義的地代を確立させ、封建的諸關係を解体したのである。次に、従来の封建的土地所有にもとづく農業生産の方法が廃止されたこと。また、それに伴い、ノーフォーク型輪作農法を中心とする科学的農法が広大な囲い込まれた土地に展開され、農業と家畜業が有機的に結合するようになり、生産力



の飛躍的な上昇をみたのである<sup>19)</sup>と。

以上のようなことから、イギリス農業は第一次囲い込みを土壌とし、第二次囲い込みを通じて資本主義的経済を完成させたといえよう<sup>20)</sup>。

#### 4. おわりに

これまでみてきたように、資本主義経済成立の準備段階である第一次囲い込みと資本主義経済の形成・成立過程である第二次囲い込みについて分析してきた。資本主義的大農経営の確立に伴い、没落した農民層が農業労働者に転化したり、近代的工業のための労働力要員となり、農村が労働の供給源になるなどの変革をけっして軽視できない。なぜなら、イギリスにおける農業変革の中に資本主義経済成立の一端を垣間見ることができるからである。たしかに、第一次囲い込みは形式的にはただ土地だけを囲い込んだだけであったが、内側に資本主義的大農経営を内包していた。つまり、第二次囲い込みへステップする土壌を提供したのである。さらに、第二次囲い込みは開放耕地制度の変容により経営における両極分解を引き起こして、イギリス農業の特徴である土地所有者と農業経営者や農業労働者の三階層を生み出した。これらは、今日の株式会社における株主と会社経営者やそこで働く労働者の三階層と基本的には同じであるといえよう。このように、第一次囲い込みや第二次囲い込みを分析していくにしたがって、これらの囲い込みがイギリスにおける資本主義経済の成立に果たした役割がいかに大きいものであったかを確認できた。さらに、別稿で、産業革命と農業の関係を深く掘り下げることによって、資本主義経済の成立と発展についての分析をしていきたい。

#### (註)

- 1) 秦玄龍 『ヨーロッパ経済史』 東洋経済新報社、1978年、P125～131。
- 2) 小林茂 『イギリスの農業と農政』 成文堂、1973年、P11。
- 3) 秦玄龍、前掲書、P117～124。
- 4) 堀江英一 『近代ヨーロッパ経済史』 日本評論社、1971年、P107～109。

椎名重明「農業における産業資本の形成」大塚久雄・船山英一・宮野啓二・山之

内靖・中木康夫・大河内暁男・菅田保之・遠藤輝明・保坂栄一・山下幸夫・長幸男・鈴木圭介・小林昇・吉田静一共著 『西洋経済史講座Ⅱ』 岩波書店, 1965年, P215~217。

- 5) 秦玄龍, 前掲書, P126。
- 6) 椎名重明, 前掲書, P214。
- 7) 堀江英一, 前掲書, P105。
- 8) 椎名重明, 前掲書, P217~226。  
松田智雄 『西洋経済史』 青林書院新社, 1982年, P100~106。
- 9) 秦玄龍, 前掲書, P98~112。
- 10) 椎名重明, 前掲書, P217~226。  
松田智雄, 前掲書, P100~106。
- 11) 小林茂, 前掲書, P11。
- 12) 堀江英一, 前掲書, P154。
- 13) 小林茂, 前掲書, P14。
- 14) 同上書, P35。
- 15) 同上。
- 16) 堀江英一, 前掲書, P155~160。
- 17) 小林茂, 前掲書, P36。
- 18) 椎名重明, 前掲書, P232~233。
- 19) 秦玄龍, 前掲書, P180~181。
- 20) 椎名重明, 前掲書, P230~236。  
小林茂, 前掲書, P11~48。  
小松芳喬 『イギリス農業革命の研究』 岩波書店, P1~22。

(主要参考文献)

- クーリッシュェル 『ヨーロッパ近世経済史Ⅰ』 松田智雄監修, 諸田實・松尾展成・柳澤尚・渡辺尚・小笠原茂訳, 東洋経済新報社, 1982年。
- オーウィン 『イギリス農業発達史』 三澤嶽郎訳, 日本評論新社, 1958年。
- ジョン・クラバム 『イギリス経済史概説下巻』 山村延明訳, 未来社, 1984年。
- 林達 『イギリス革命の構造』 学文社, 1970年。